フロインドリヒ博士を迎えて

山本　一清

去る三月十九日、大阪毎日新聞の上海電報は、突如として、獨逸ポツダム天文臺のフロインドリヒ博士が神戸に接近しつゝあることを報じた。自分は此れを見て、ハツと胸を躍らせた。「スマトラの日食からの歸途なのだ」

其の朝、大學へ行つて、新城教授と其の事を話し、何とかして京都大學に博士を迎え、出來れば一場の講演でも頼みたいと思つた。船はプレシデント・キルソン號で、二十日には其れが上海から神戸へ着く筈だとわかつたので、神戸の船會社へ電話をかけるやら、船あての歡迎電報を打つやら、又、京都の二ヶ所のホテルに室の先約が出來てゐるか否やを尋ねるやら、いろいろ手を盡した。しかし、二十日の正午頃までには、博士からの何の消息も無く、ホテルの先約も無いらしく、一體、その船が神戸へ何時に着くか、船會社からの返事では、明瞭でなかつた。

「船は着いても、博士たちは上陸の豫定では無く、すぐ、同じ船で横濱へ、それから米國へ、行かれるのかも知れない」

かうも思はれた

×　×　×　×

エルヰン・フロインドリヒ博士はドイツ國のベルリン市郊外にあるポツダムの天體物理天文臺に於けるアインシタイン高塔觀測室の主任である。自分は、外遊中、一昨年の末、此の有名な天文臺を親しく訪れ、臺長ルーデンドルフ氏等の厚意を受け、かのアインシタイン塔の内部をも見せられた。塔は、アインシタイン氏の相對原理を實驗的に研究するため歐洲大戰中に着手せられたもので、米國のキルソン山天文臺と同樣に、一方に於いて太陽光線の分析研究をすると同時に、他方に於いては天體物理の實驗研究をする目的のためあらゆる意味に於いて最も進歩した構造と設備とが計畫されてゐる。自分が訪れた時は、塔の全體は未だ完成せず、殊に太陽觀測の備へが進行中であつて、只、二三人の男女の研究者たちが地下層の室で物理學の實驗研究をやつてゐるのを見た。自分は其の時フロインドリヒ博士に會はなかつた。博士は、或る都合で、外出中であつた。

フロインドリヒ氏は可なり以前からのポツダム臺員である。殊に早くから相對原理の研究に專心し、1915年には見事な書物を著はされ、それは全世界の學者たちに讀まれてゐる。1914年8月のロシアの日食には、ポツダム天文臺からの遠征隊長として行き、アインシタイン原理の實際を觀測する筈であつた。不幸にして八月の始め、歐洲大戰が起り、露獨兩國は互ひに敵對することゝなり、當時ドイツの軍籍に在つた此のフロインドリヒ博士は、多くの觀測器械ぐるみ露軍に捕へられ、捕虜として數ヶ月の間、敵地に幽囚せられたことがある。――とにかく、此の時の計畫が日食の時を利用して相對原理を實證しようとする最初の試みであつた。(此の實證は、後に1919年に至つて、英國の學者たちが南太西洋上の日食觀測に於いて、遂に成功した。)

×　×　×　×

さて、此の三月二十一日の日曜兼祭日の朝自分は用事があつて大學天文臺へ行つた。其の時、突然、ミヤコ・ホテルから天文臺あてに電話がかゝり、

「昨日から、ドイツの天文學者の一行が宿泊中であります。一行はフロインドリヒ博士夫妻とHフオン・クリウベル氏とです」

と言つて來た。「さては、來られたか」と、自分は直ぐ其の電話の返事に

「正午過ぎにはホテルへ御訪れするから、左樣御傳へを願ふ」

と言つて置いて、一方、直ちに新城教授に電話をかけた。ところが、此の日曜の好晴に、教授は朝早くより外出された由で、果して何所へ行かれたやら全くわからず、遂に、フロインドリヒ博士入洛の報を教授に通ずる途を全く失つて了つた。上田助教授も亦此の頃不在であつた。それで、荒木助教授にだけは電話で此の事を知らせて置いた。

さて、とにかく、午後一時、自分は英子と共にミヤコ・ホテルに驅けつけた。そして、今ちようど午餐を終はられたばかりの博士と夫人及びクリウベル氏と握手をした。博士は非常に長大な體軀の持ち主で、元氣の良い顔に喜びを一つぱい表はして、

「ほんとに有難う。どうして私共の來たことを御知りになりましたか？　なに?!　上海

からの新聞電報！　それから、ホテルよりの電話で?!　なんと、日本の通信機關は鋭どいですね!!」
と、切りに感心の體である。――――始め自分等は博士等が何語を話されるだろうと、多少不安であつた。「若し、ドイツ語だとすると英子の口は全く封じられて了はなければならないが」と心配した。ところが、初對面の時に、すばらしい見事な英語を此の一行三人の口から聞いたので、自分は大に安心した。
「スマトラの日食は如何でした」
「少し曇られました。しかし大したことは無くて、寫眞は撮りました。之れが私の三度目の日食です。第一回は1914年のロシアで、其の時は戰爭のため觀測は駄目でした。次ぎは1922年の印度洋の日食で、私はクリスマス島に行きましたが、あの時は大雨續きで、日食などは思ひもよらず、洪水で流されさうでした。こんどのも安全ではありませんでしたが、それでも一通りは見ました。」
「私は二度行きました。一度は1918年に鳥島へ。次ぎは1922年に米國カタリナ島へ。そして二度共に曇られました。御一行は三人ですか？」
「いえ、ドクトル・キーンレが居たのですが同君はスマトラから西へ直ぐ歸國しました。私は暫くジヤヅに滯在して、相對原理の講演をしました。今から米國へ渡り、キルソン山天文臺に一ケ月滯在して歸國する豫定です。」
「今日、これからは？」
「今日は、午後、案内者を雇うて市内を見物する筈であつたのですが、其れを變更します。すぐあなたの天文臺を見せて下さい。」
との御註文。勿論、それは此方も望む所、すぐ車を雇ひ、岡崎公園の景色の二三を説明しつゝ、まもなく、五人の總勢は大學の門内に入り、天文臺の前で車を止めた。
天文臺では、先づ、北館の各室を見せた。時計室、計算室、大ドームなど。――殊に直徑九メートルの大ドームが、只、人の腕力で易々と動く成績には、博士とクリウベル君共に驚いて、みづから幾度もハンドルを廻はしたりせられた。廊下に懸けられてあるキルソン山製の大型天體寫眞も大に博士一行を喜ばせた。博士は、中にも、センタウルのオメガ星團の寫眞の前に暫く立ち止まつて夫人に其の説明をしてゐられた。屋上へ上つて、廣く四方に見渡される市街の内外の景色も亦此うした旅客の心を慧いた。
南館では、新着雜誌の室に博士は暫く腰を下し、なつかし氣に諸雜誌――殊にドイツからのナハリヒテンや、物理學や器械學の雜誌のページをめくられた。永く、己が研究室を離れて、旅し續けて居る身に取つて、旅行先で此うした出版物――殊に、自分の故國からのものを見ることは、譬へやうも無い大きな喜びある。自分も此うした經驗を度々持つた
圖書室へ入つた時、クリウベル君は、早速オポルツアの日食表を開いて、「此の次ぎの日食は何日？　殊に日本で見える此の次ぎの日食は？」と搜し始める。それは1936年6月19日だと知れて、
「其の時には又日本へ來るんだ」
と言ひ合はれた。自分は書棚の中から、フロインドリヒ博士著の「相對原理」を引き出して博士に見せた。表紙は汚れてゐたが、博士は
「よく讀まれてゐる證據だ」
と喜びつゝ、ポケツトからペンを出して其の表紙裏に紀念の署名をせられた。
此の時、ちようど荒木助教授が見えた。早速此の珍客を紹介すると、フロインドリヒ博士は雜誌室の一隅に腰を下して、
「スマトラの日食觀測に用ゐた太陽寫眞裝置を御話ししませう」
と言ひつゝ、紙の上に種々の圖を畫いて、説明をせられた。
南館から次は星學研究室に案内した。そして新しい分光太陽寫眞機を見せた。――すると自分が此器械の掩ひを取りきらない前に、
「おゝ、此れが此所に來てゐる!!」
と博士は叫んで、クリウベル君を振りかへられる。自分は其の表情に驚いて、
「どうしたのですか？」
と聞くと、博士は
「此の器械はバムベルグ會社から來たのでせう？」
「えゝ、さうです」
「ベルリンのバムベルグ會社の工場で此の器械の試驗をしたのは私たちなのですよ。あの器械が此の京都の天文臺に買はれて來たのだとは知らなかつた。意外です。しかし、此所で之れを再び目の前に見るのは愉快です」
之れを聞いて、自分の喜びは博士以上であつた。全く不思議な緣と言ふより言葉は無い。そこで、自分は、京都に於ける此の器械の使用計畫を話し、尙ほ、責任者なる博士から實

際使用上の種々の注意を聞いた。

「今持つてゐるシーロスタトが小さくて此の器械に合ひ兼ねますのが殘念です。是非、近々の中に直徑50センチ位のシーロスタト鏡が慾しいと思ひます」

と自分が言ふと、

「そうですね、少し小さい。しかし、50センチの鏡では、焦點に集まる熱量が非常に大きくて、面倒を惹き起すことになりますから適當に熱を吸收する裝置が一苦心でせう。寫眞機の運動裝置さへ良くあれば、可なり小さい鏡面でも差支へなく研究に使へますよ。」

「此の器械と全く同じ大きさで此の型のものを、今、世界の何所かの天文臺で使つて居ませうか？　使用上、參考のために御聞きしたいですが……」

「いえ、此の大きさのものをバムベルグ會社が作つたのは此れが始めてです。此れが、世界で最大の型です。」

此う聞いて自分は驚いた。と同時に、此の器械を持つてゐる京都天文臺の誇りと、學術上の大責任とを感ぜざるを得なかつた。

此の時、中村要氏が天文臺へ來られた。紹介により、すぐ同氏は博士たちと握手せられた。五尺九寸の大男である中村氏も博士の長い身長には及ばないことが衆目の前に立證せられた。——早速の思ひつきで、中村氏の手をわづらはし、一同、北館の入口を背景として紀念寫眞を撮影した。（本誌の口繪は其れである。）

×　×　×　×

天文臺一巡の後、博士一行三人と自分等夫婦は市内の見物に行くことゝなつた。七人乘の車一臺に皆が乘り込んで、先づ大學の北門から出町に出で、今出川通りから御苑内に入り、御所の外壁を眺めて、丸太町通りに出で西へ眞直ぐに二條城に赴いた。それから又、四條通り、烏丸通りを走り、折から彼岸で雜踏を極めてゐる東本願寺の内部を案内した。

「今日、午前中は、ホテルに近い知恩院と言ふ御寺を見ましたが、參詣人は誰も無くて全く淋しい景色でした。ところが、今は此の盛んな參詣者で埋まつてゐる本願寺を見て、日本の生きた宗教を知るのは大きなインスピレーションです」

と博士は堂の中で自分にさゝやかれた。夫人とクリウベル君とは珍らしい此のあたりの光景をカメラに收められる。

本願寺からの歸途

「土產ものが買ひたい」

と言はれるから、四條通りの大丸に連れて行つた。夫人は美しい帶地などを少しく買はれ英子と、いろいろ品物の撰擇をしてゐられる間、博士とクリウベル君とは、各々の持ち場の賣り子から中央計算室へ飛び交ふ計算箱の敏捷な運動ぶりを見て打ち興じられる。

もはや、日は夕暮に近くなつたのに、

「日本の茶が飲みたい」

と言はれるので、何所か良い場所を考へて見たが、一寸、適當なのが見當らなかつた。それで殘念ながら、寺町のかき屋に少憩して簡單な茶菓を喫し、それから、急いで、一行をホテルに送り屆けた。

博士一行は其の夜八時過の急行で東京へ立たれた。同夜、自分も、少しく遲れて東上する筈であつたため、見送りはしなかつたが、英子は獨り一行を京都驛に見送つた。同時に此の時、新城教授も驛に驅けつけて、出發間ぎはの一行に會はれた由。

×　×　×　×

二十二日の朝、自分は東京に着いて帝國ホテルに入つた。すると其の宿泊名簿にフロインドリヒ氏一行の名を發見した。すぐ、名刺を送つて自分は到着を博士に知らせると、博士も大喜び、

「明朝、一しよに食事をしませう」

とのことであつた。

フロインドリヒ博士は、東京で、大使館に於ける用事などのために可なり多忙らしく見えた、それで、

「東京天文臺を訪れる時間がありませんでした。たゞ、プロフエソル・ヒラヤマには會ひました。東京にもアインシタイン塔が出來るさうですね。アインシタイン塔は費用ばかり高くかゝつて、贅澤なものですが」

と、二十三日の別れの時に、博士はホテルの休憩室で自分に話された。（終）

斷　想

同志社　飯　義　壽

世相の煩忙と輕騷と利慾の濁流に惱む若人よ。眼を上げて大空を眺め、而してその悠久に浸れ。かつて吾等を救世主に導きしはベツレヘムの星ではなかつたか。實にも星を眺むるの心は吾等を解脫と解放と、否、更に人格の陶冶にまでも導くであろう。云々。